

智頭の山と暮らしの未来ビジョン

2020年3月

智頭町

目次

第1	ビジョン策定の経緯	
1	前回のビジョン	1
2	ビジョンの役割	
3	ビジョンの方向性	
第2	智頭の生活史と林業史	
1	智頭の生活史	2
2	智頭の林業史	3
第3	現状と課題	
1	町の現状	5
2	森林の現状	6
3	森林整備	9
4	林業経営	11
5	木材産業	13
第4	山と暮らしの未来ビジョン（4つの柱）	
1	山村の暮らし「生活」と「生き方」	17
2	自然環境「ヒト」と「ヤマ」	
3	山林の管理・マネジメント「所有」と「利用」	
4	林業経営「木材」と「人材」	18
第5	基本方針（未来へのアクション）	
1	山村の暮らし「生活」と「生き方」	19
2	自然環境「ヒト」と「ヤマ」	
3	山林の管理・マネジメント「所有」と「利用」	20
4	林業経営「木材」と「人材」	21

第6	推進に向けて	
	推進に向けて 22

第1 ビジョン策定の経緯

1 前回のビジョン

2008年3月に「智頭林業・木材産業再生ビジョン」を作成しました。そのビジョンでは、(1)「低コスト林業の推進」(2)「智頭材の需要拡大」(3)「癒し、憩いの森林づくり」(4)「木質バイオマスの取り組み」をビジョンの大きな柱として期間を10年と定め、推進してきました。

2 ビジョンの位置付け

ビジョンの作成は、そのテーマと内容について慎重に議論される必要があります。町土の93%を占める山林は単に「林業の現場」だけでなく、わたしたち町民の暮らしを支える大切な社会基盤です。直近の10年を見ても旧ビジョンの枠組みを超えた社会的な役割、位置付けが「山林」に求められてきています。

このビジョンには、あえて具体的な目標等を示していません。「これから智頭の山をどうするのか?」、「次の世代に何を伝え、何を残すのか?」、「93パーセントが山林で覆われた小さなまちで、どのように山に寄り添い暮らしていくのか?」など、私たちのあり方を見つめ直し、行動し、振り返るための「よりどころ」となるものです。

3 ビジョンの方向性

改めて智頭町の現状を振り返り、次なる時代を見据えた新たなビジョンが必要となっています。このビジョンでは、人口減少社会の中で、現在の町の行政区域の存続自体も不確定な将来を見据えつつ、町土の93%を占める山林と人がいかに調和し、暮らしや産業と共に地域の持続性を保っていくかを示していきます。

第2 智頭の生活史と林業史

1 智頭の生活史

2018年2月に「智頭の林業景観」は国の重要文化的景観の森林の利用として選定されました。これは本町の林業景観が「地域における人々の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」として、私たちの暮らしが昔から山林と共にあることの証でもあります。

藩政期に書かれた地誌「因幡民談記」には各地域の産物として、智頭郡中諸村では各種紙類・ウルカ（鮎）・漆・木蠟・真綿・柿・茶・独活・蕨・栗茸・猪・猿・熊を、本谷の村々ではつづら藤・茶・鳥獣等を列挙し、後の「因幡志」でも郷・村別に産物をあげており、豆腐・湯葉・菅笠・晒葛・柳・羽葉・槿・栗・ノブカワ・麻苧・山鳥類・黄蓮等多彩な産物があげられています。

また、焼畑も行われ、「鳥取県農事調査書」によると、明治24年当時智頭郡で約22町（ha）の焼畑があったとの記述があります。旧山郷村・板井原村は炭焼きの村として知られ、山村の豊かな恵みを存分に活かし、人と自然が調和した生業を創り出していました。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その1

黄蓮も、この辺りでは山の副産物としては有力なものでして、秋、彼岸から先に大体掘ったものです。よおけえ掘りましたね。戦後それで家を建てたという人があるぐらいですから。春、雪が消えたらすぐ、ポッと芽が出るんです。今はその芽をシカに食べられてしまう。

2 智頭の林業史

徳川藩政時代、まだ交通が不便な時代において、杉材の利用用途として、高級な板材及び桶樽材として、奥山で運搬の容易なクレ材（桶・樽用にみかん割にされた板）へ加工され、川下へと搬出されました。これらの生産の初期には、智頭町の東側に位置する東山・沖の山を一带とする天然杉の無節材を中心に選んで伐っていたので、当時から人工林においても植林目標を、クレ材が採れる大径木無節材を目的として保育され、「枝打間伐」が習慣的に智頭林業の特徴として行われてきました。

戦時中の乱伐過伐の後を受けて、全国的に緑化運動が起きました。智頭町においても町内有志等が集い「治山治水、林野緑化特別委員会」を組織し、荒廃した山林の復興に合わせ、全林野の造林達成のための大衆造林運動を起こしました。「智頭の緑化は伊達ではないぞ 千万植えて生き抜こう」

これは当時、今後 10 年間に 1000 万本の杉苗を植えて、町内に 3,000ha の拡大造林を実現しようと緑化運動の目標としたものです。この結果 10 カ年の造林目標であった 3,000ha は 7 カ年で達成し、昭和 44 年末には 7,000ha の拡大造林を実現し、当時の町内山林面積 20,802ha の内、民有林 16,782ha、人工造林 12,300ha と今日と並ぶ水準まで人工造林が普及しました。

智頭林業は、戦後に有名林業地として注目されるようになりました。古くから京阪神の需要地を控えて発達した吉野・和歌山・三重地方や東京・東海道方面の需要地を対象として発達した天龍林業のように、企業として大規模に発達した先進林業地に比べ、智頭林業は山陰の僻地において、天然杉を元に杉づくりを始め、300 年以上の長い年月の間に今日の基礎を築いたものです。規模は狭く、所有区画が細かく分割され、家族経営を主体とした「資産蓄積林業」として「必要以上に伐らない文化」とともに長伐期大径木を目的としてきたところに、今日まで引

き継がれてきた智頭林業の特徴が見られます。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その2

除間伐で木を選ぶときは迷う。

自分家の木ですから、伐らんにこしたことはない。自分家の木は伐りたくないから、まあ伐るのは来年にしようとかね。ちょっと曲がっていたり、雪でエボが飛んだりしていれば躊躇なくチェーンソーを入れるが、将来的にどっちの木を残そうかみたいなきときは、2本とも残そうみたいな感じで。

そらあ30分ぐらい考えとるときありますよ。それで両方伐らない。だから除間伐は大体他人に頼めという。

第3 現状と課題

1 町の現状

(1) 人口

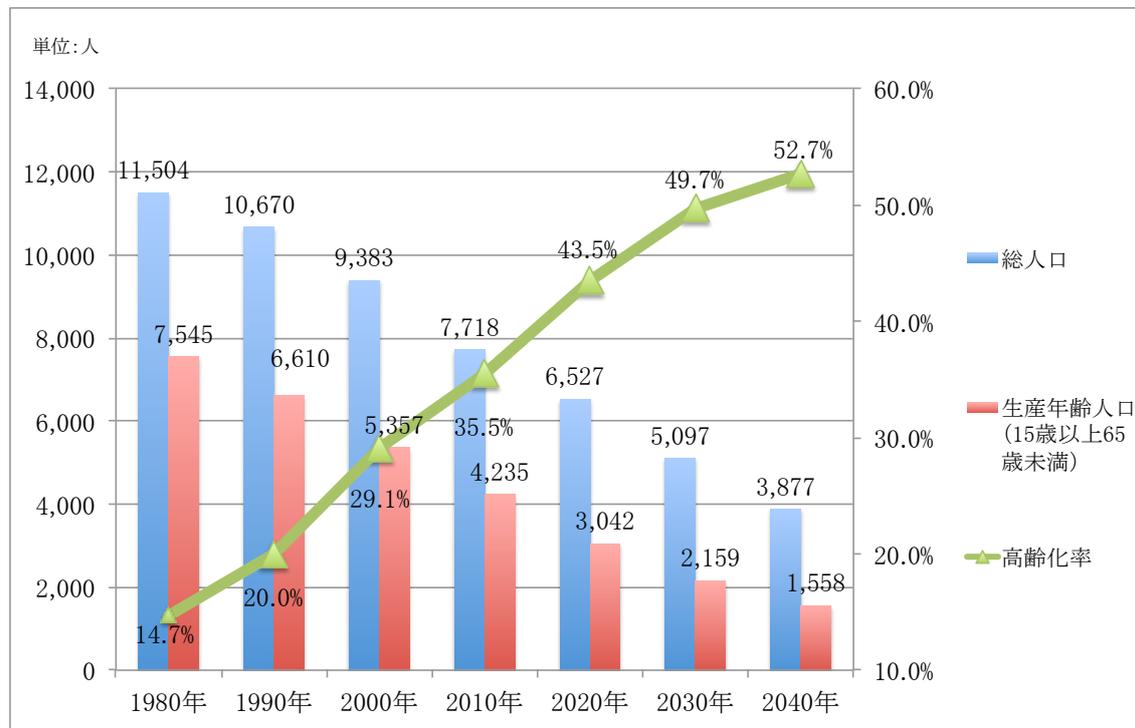
本町の人口は、2019年4月1日現在で6,954人です。

人口の推移を見てみると、1950年代には14,000人以上いた智頭町の人口は2019年には7,000人を割り込み、2040年には4,000人を下回るような推計も出ています。

(2) 高齢化率

2019年4月1日現在での高齢化率（65歳以上）は40.45%です。智頭町の人口は1950年代から減少傾向にあり、少子化や若者の流出もあいまって高齢化率も年々上昇しています。

図-1 智頭町の高齢化率と生産年齢人口（15歳以上65歳未満）推計



出典：国立社会保障・人口問題研究所（2018年3月推計）

(3) 産業

産業分類別の就業者数の推移を見ると「林業、狩猟業」は1950年から一貫して減少傾向にあります。現在の人口推移のままいけば、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）自体も減少してしまうことから、産業の担い手自体の確保も重要となってきます。

表-1 智頭町の人口、産業分類別就業者数の推移

	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2015年
人口	14,472	14,390	12,392	11,504	10,670	9,383	7,718	7,154
就業者数	6,802	6,834	6,797	6,138	5,488	4,614	3,472	3,383
農業	3,519	2,872	1,923	798	544	392	193	303
林業	688	605	411	466	234	153	105	92
漁業、水産養殖業	1	0	0	2	2	1	2	0
鉱業	12	37	13	12	19	34	0	0
建設業	336	392	642	839	642	679	398	331
製造業	724	977	1,864	1,848	2,091	1,448	860	787
電気、ガス、熱供給、水道業	304	43	39	32	16	16	9	7
運輸、通信業		233	256	215	179	159	133	138
卸売、小売業、飲食店	656	761	712	794	665	629	462	404
金融、保険、不動産業	29	49	68	84	83	82	64	61
サービス業	393	732	734	868	842	846	1,036	1,111
公務	129	132	126	173	171	174	157	142
分類不能の産業、不詳	11	1	9	7	0	1	53	7

出典：国勢調査（各年版）

2 森林の現状

(1) 面積

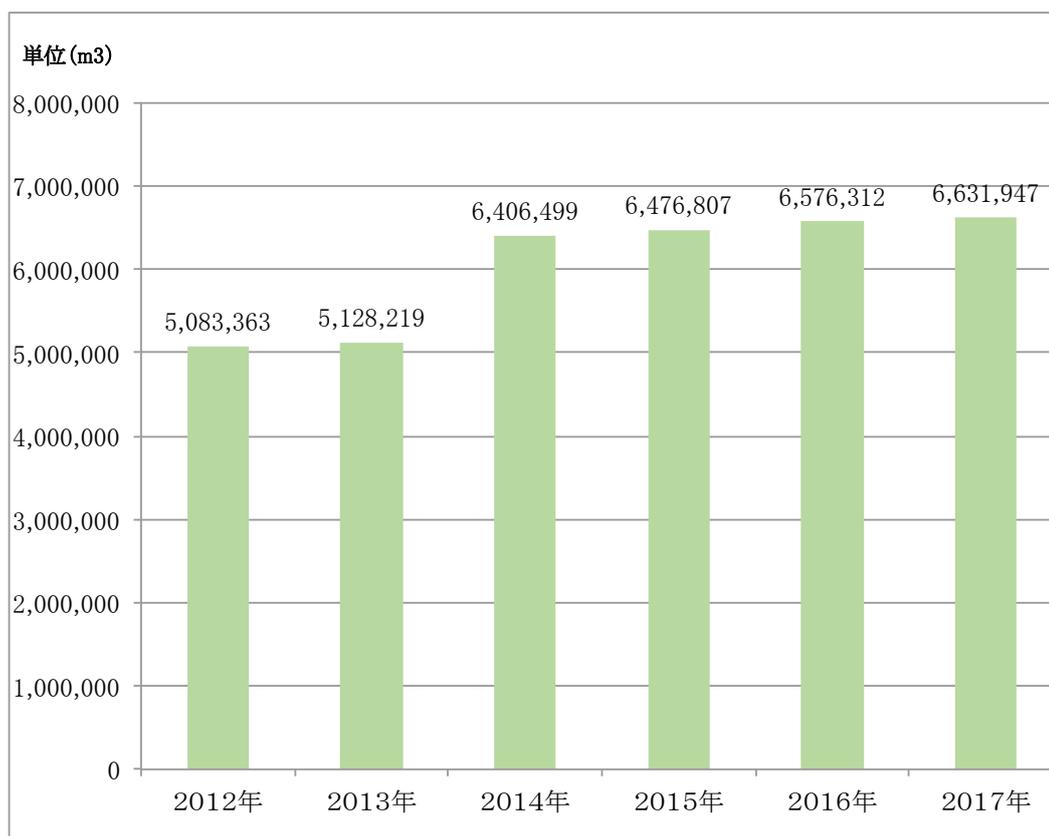
本町の総土地面積は22,470ha、うち森林面積は20,840haです。これは総土地面積の約93%であり、森林は町民の重要な社会基盤であると言えます。

その中でも民有林は17,343ha（県有林235ha、町有林509ha含む）を占め、内人工林は13,628ha、その他国有林が3,497haあります。

(2) 森林蓄積

本町における人工林を中心とした針葉樹（スギ・ヒノキ・マツ）の森林蓄積は600万m³を上回り、年々増加傾向にあります。

図-2 智頭町の森林蓄積(針葉樹)推移



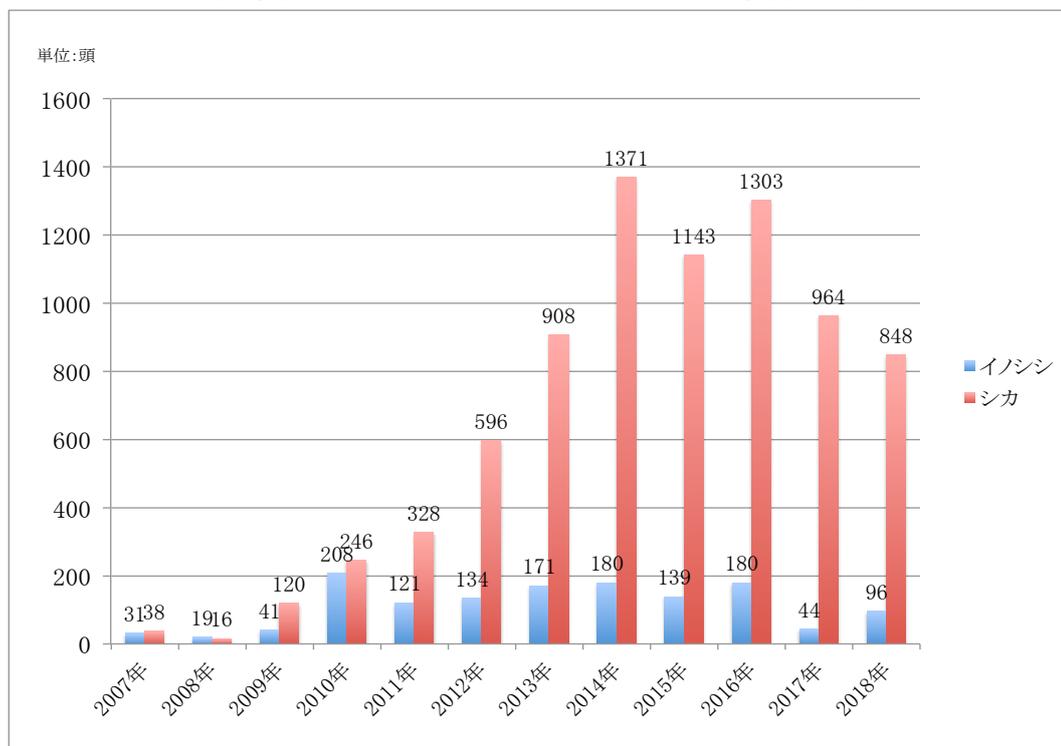
出典：「鳥取県林業統計」

※2014年の大幅な増加は、「新鳥取県林分材積表」により算定を行っているため

(3) 鳥獣害

森林における鳥獣害被害として代表的なものに、シカによるヒノキの剥皮害があります。近年シカの個体数が増加しており、山林所有者の財産を守るためには、適切な被害防止対策が必要となります。

図-3 智頭町のシカ・イノシシの捕獲頭数推移



出典：智頭町山村再生課調べ

写真-1：林内に広がるシカの剥皮害



(4) 自然災害

2018年の西日本豪雨では、7月3日から9日までの総降水量が508ミリを観測し、町内林道の8割が被害を受けました。今後、自然災害に対する備えはますます重要性を帯びてきています。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その3

みんなめいめいで勝手に動いてるような山造りだったら多分続かないんですね。

先人が造られた山というのが、今われわれがそれを見て成果があるから、今たまたま智頭の材がいいですよと言われるだけであって、われわれが造ったもんじゃないですが。当然ね。

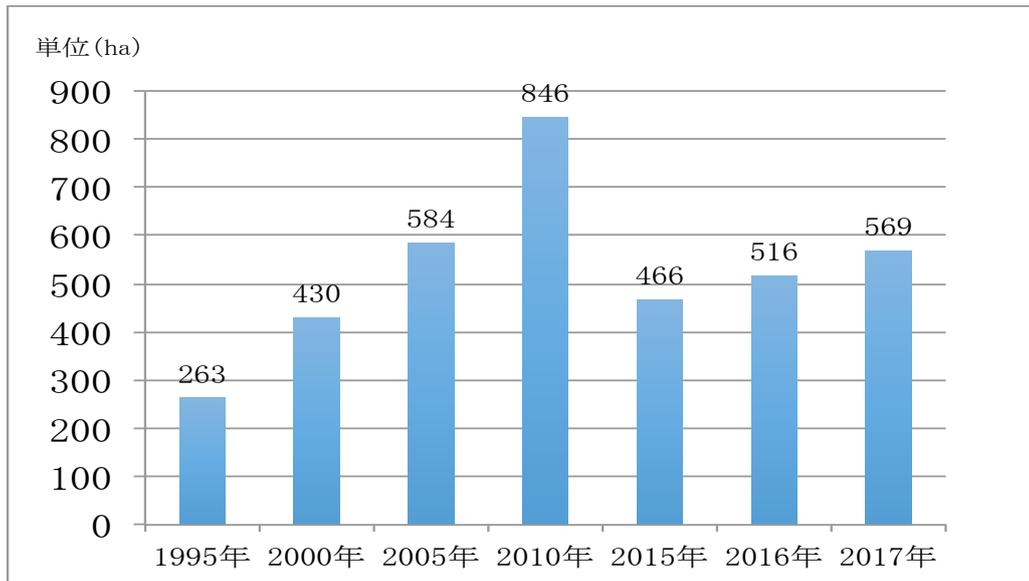
それを引き継いだときにどういう山造りをして、次の方が施業されるときに、「いい具合にしてもらったな」というようなことが見えるようなことを、われわれの世代が今つくつとかないといけないじゃないかなと思うんですけどね。

3 森林整備

(1) 間伐

智頭町では毎年400～500haの間伐による森林整備を行なっています。しかしながら智頭町の人工林約13,628haの適切な整備には、より一層の間伐の推進が必要です。

図-4 智頭町の間伐面積推移



出典：鳥取県林業統計

(2) 路網

適切な森林整備を行い、木材を搬出するためには、効率的な路網整備が重要となります。本町でも路網整備に力を入れ、年間 50km を超える路網整備を実現していますが、自然災害リスク等にも対応した災害に強い路網整備が必要になります。

表-2 智頭町の林内路網の整備状況

年度	作業道 開設延長 (m)	林道 開設延長 (m)	林内道路 (林道+公道) 密度 計m/ha
1975年	-	606	4
1985年		204	12
1990年	6,396	2,979	12
1995年	500	1,806	13
2000年	5,819	604	13
2005年	2,867	340	13
2010年	28,660	865	13
2015年	41,746	480	14
2016年	49,210	426	14
2017年	51,145	264	14

出典：鳥取県林業統計

(3) 地籍調査

2019年3月末時点での地籍調査の進捗率は約40%となっています。森林の境界を知っている地権者の高齢化や、林地の経年変化により、境界が不明確になりつつあり、今後は所有者の世代交代等により、ますます境界問題が複雑化することが予想されます。

(4) 森林経営計画

森林経営計画とは、森林整備を効率的に行うために一体的なまとまりのある森林を対象として、5年を1期として効率的な森林の施業と適切な森林の保護に取り組む計画です。

現在、智頭町森林組合を中心として計画を策定しており、町内の民有人工林のうち、約7割の森林について計画に基づく森林整備を推進しています。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その4

わたしたちの時代は多分、山を近くに作る時代だったかなと思うんです。架線張りがなかなかできませんしね。

だから作業道をたくさんつけて、そこに行けるような状態をつくっておいて、次の方が今度はそこで採れる木を、いいものがあるというのをちゃんとまた認めてもらえるような人が次におられるといいですけどね。

4 林業経営

(1) 山林所有者

智頭町における山林所有者は約1,200件です。戦後に植林し、木を育ててきた所有者が少しずつ世代交代しようとしている現在、木材の価格も低迷する中で、所有者の山への関心は薄れて

きており、所有者に山林に関心を持ってもらうことが重要です。

(2) 林業従事者

かつては本町の基幹産業であった林業も、近年ではキツイ・汚い・危険・金にならない「4K」といわれ、敬遠される特殊産業となりつつあります。技術革新により少しずつ林業従事者の作業負担は減りつつありますが、林業従事者の4Kのイメージ払拭は喫緊の課題です。

しかし一方では、東日本大震災や環境問題をきっかけとした意識変化や、機械化等による労働環境の変化等から、若者、移住者、女性の林業現場への就業が少しずつ増えてきています。

(3) 生産性

林業における生産性とは「m³/日（1日に平均で何m³の木材を生産したか）」という指標が一般的になっています。これは近代になって作業道具やシステムの機械化（ノコギリからチェーンソーへ、木馬等での運材から作業道による機械集材へ）や高性能化（プロセッサ等による高速枝払い及び造材へ）により飛躍的に向上しました。

他方で生産性のみの主眼を置くのはリスクを伴います。一度に多くの木材を収穫可能な強度間伐や、集材コストを下げるための列状間伐等を一様に促進してしまい、将来的な山林の資産価値を下げてしまう可能性も秘めています。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その5

収入が多いことが幸せっていうか良かったって単純にイコールではないっていうことは確かだわな。

やっぱり、たまたま木の景気が良かったっていうだけの部分もあれば、自分らが努力して自分たちで仕事をできるようになったのでその報酬と考えるということもあるし。

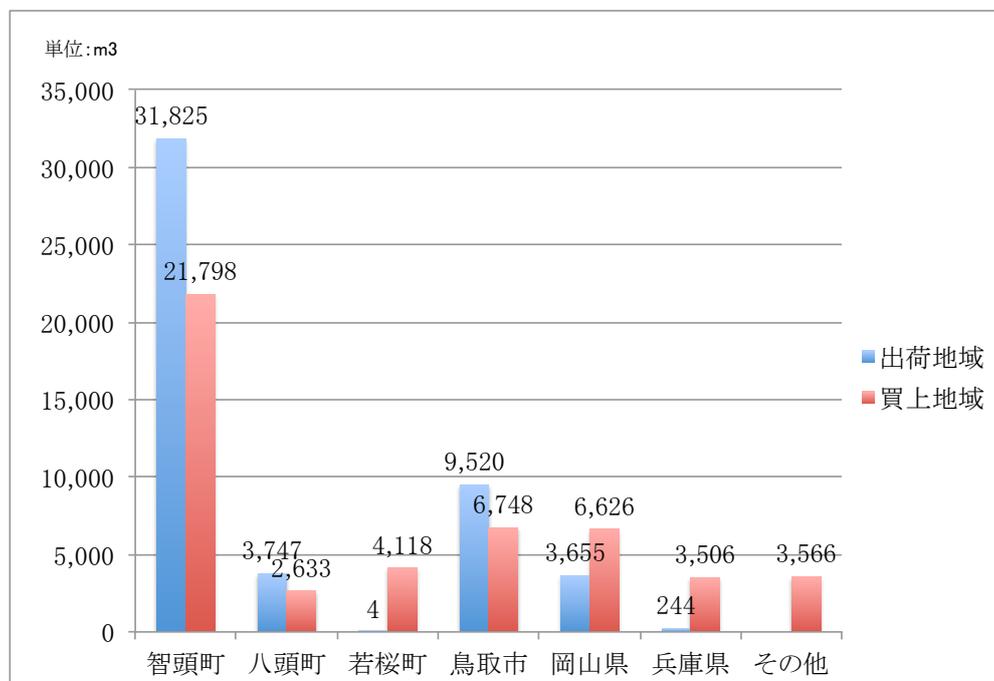
でも、それこそ苦しい時や悩ましい時があつてこそ、人間が、ちょっとまあ熟れてくるっていうふうに考えるとしたら、まあそういうこともありかかって思えるというのも。人生はいいことばっかじゃないし悪いことばっかじゃないし。

5 木材産業

(1) 原木市場

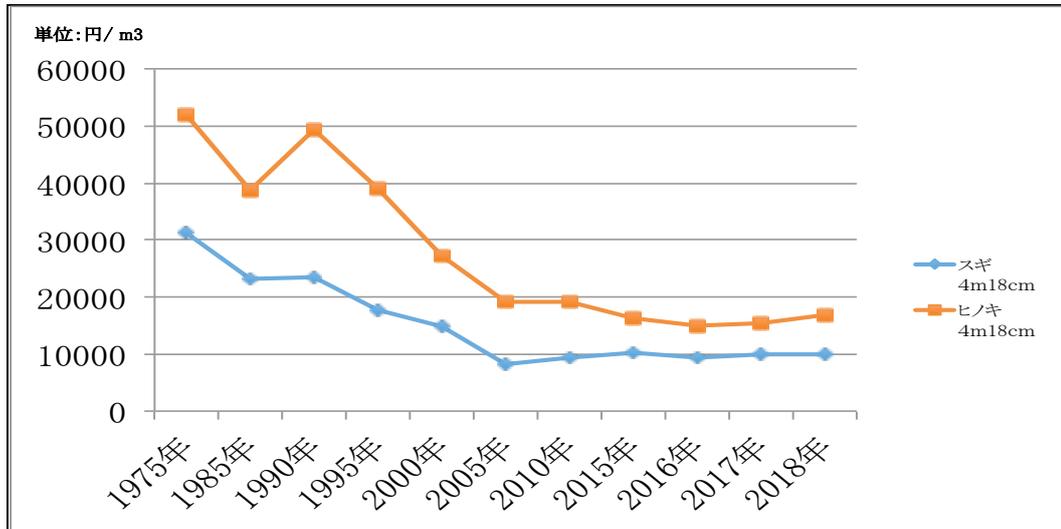
智頭町で唯一の原木市場「石谷原木市場」では、年間約50,000m³の原木を取り扱っています。そのうち町内からの出荷が約30,000m³となっています。木材の価格はスギは1995年、ヒノキは2005年以降に平均単価20,000円/m³を下回るなど、低迷が続いています。

図-5 石谷原木市場 年間取扱量(2018年度)



出典：智頭町山村再生課調べ

図-6 木材価格の推移

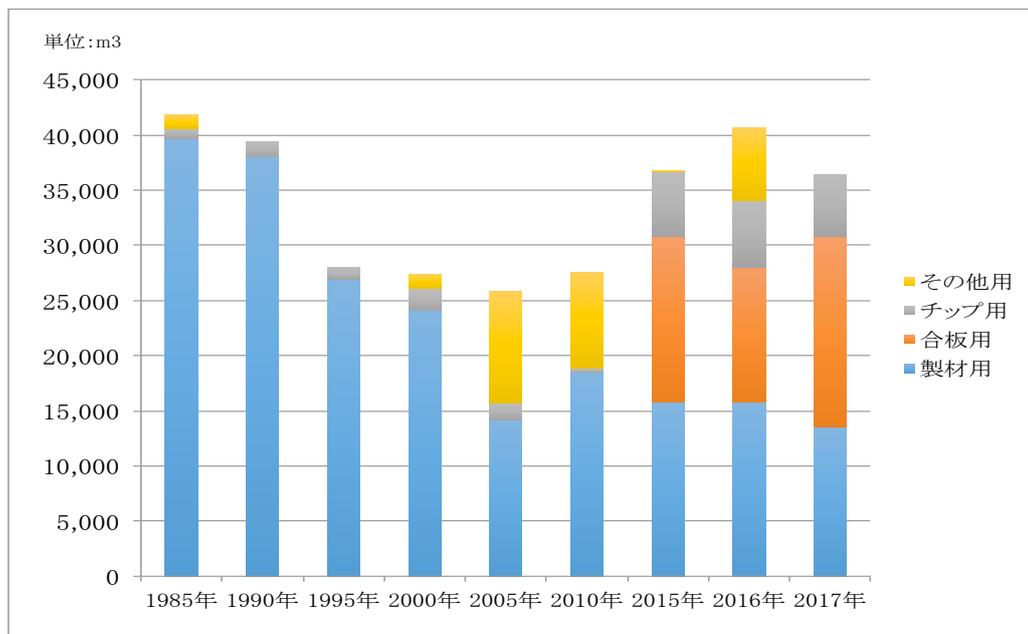


出典：鳥取県林業統計

(2) 素材生産量

智頭町における原木生産は年間30,000m³前後を推移しています。しかしながら、下の図から見られるように近年では製材需要が減少し、合板やチップ材の需要が高まっています。

図-7 智頭町の素材生産量の推移



出典：鳥取県林業統計

(3) 製材所数

1950年代には最大41軒あった製材所は、現在11軒まで減少しています。外材（輸入材）に負けない競争力をつけるため、全国的に製材工場の大規模化が進む中で、智頭町独自の生き残りの戦略が求められています。

(4) 木材利用

住宅着工数の減少に伴い、木材利用は減少しています。また、消費者の和室離れ等により、高級材利用の機会も減少しています。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その6

市場で働く者は歯は見せるな、笑うなど言われとった。若い子が笑って、出荷者に叱られたこともある。出荷者はそれで勝負しとるけえ。出した人のことを思ってちょっとでも高く売ってあげたい。

市場で預かったらな、責任があるじゃけえ、いかに高う売ったるか。高く売るけど、買った人にも喜ばれるように。それがテクニックじゃけえ。

お客も、買えたいうて喜び、出荷者も高う売れたなって喜ぶのが、一番。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その7

市場ができる前は、各製材所が木を分けてごせい、分けてごせいと言って木がよく売れたけえ、家の前を入れ違いに木を積んだトラックがじょーったもんなあ。

どんどん値段が上がっていくけえ、とにかく早うに製材所に持ってかないけんいう時代。

その当時、智頭の駅前やなんか、今農協が建ったり森林組合があったりする周りは、材木でゴンゴン音がするし。ブームだったなあ、当時は。材木で繁盛したもんですわ。

◆コラム：智頭林業を支えた先人のお話 その8

今の人には家を建てても材料には興味がない。昔は大工さんがコンコンコンコンやりおったでしょう。それで今はというとチッチッチッチッ巻いて、ボルトで締めて終わりですわ。ですから職人が育たんです。

今は家建てる人が、杉とかヒノキとかケヤキとか松とかいうことは全然無知じゃ。うちはヒノキを使っとるけえとか、うちは松を使っとるとか、全然関係ない。とにかく、木をもらうだけ。それで、銀行から借り入れをして手続きもして、建売住宅がやってくれる。

設計が上手になっとったら、住みよかったらいいということすわな。

第4 山と暮らしの未来ビジョン “4つの柱”

～智頭での暮らしを創造し、自然環境と経済活動の調和のとれた
誇りと責任ある智頭林業の実現へ向けて～

1 山村の暮らし 「生活」と「生き方」

私たち一人ひとりの暮らしがこの町を支えています。私たちが自らの生きる選択肢として、智頭という山村を選択し、暮らしに生きがいを感じ、誇りと責任を持てる地域を創造していく必要があります。

2 自然環境 「ヒト」と「ヤマ」

様々な関係者で智頭の山について話し合うことが重要です。山は私たちの生活基盤であり、私たちは智頭という山村での暮らしから様々な自然の恵みを享受しています。

また一方では、今後起こりうる自然災害等のリスクを認識し、それに備えて暮らしていく必要があります。

私たちは他の動植物を含めた大きな山林生態系の一部です。智頭という山村で永く暮らし続けるために、自然環境への理解と配慮に努めることは、私たちの責任です。

3 山林の管理・マネジメント 「所有」と「利用」

智頭の自然環境、経済活動、そして暮らしの調和を目指す、適切なルールを定めた上での、山林の所有と管理・利用が求められます。そうすることによって、私たちは山林から持続的に多くの機能と価値を引き出し、より災害に強く、資産価値が高く、美しい山林の実現が可能になります。

4 林業経営 「木材」と「人材」

先人が大切に守り育ててくれた智頭杉は、このまちの誇りです。私たちも智頭の山林と人材を育み、地域に雇用を創出し、誇りと責任ある智頭林業を実践していきます。

第5 基本方針（未来へのアクション）

1 山村の暮らし 「生活」と「生き方」

（1）山に寄り添う暮らしの創出

薪利用、狩猟、山菜採り、民泊、教育、健康づくり等、智頭の豊かな山林資源を活かした暮らしを創出します。

（2）町民の木づかいの促進

智頭の木が住民の暮らしにより身近なものとして浸透するよう努めていきます。

（3）地域の担い手創出

世代や産業・教育・福祉等の枠を超え、地縁を支え、地域を支える担い手の育成に取り組みます。

（4）再生可能なエネルギー及び資源の自給

持続可能な暮らしの実現に向けて、エネルギー及び資源の自給により、地域の安定性を高め、農山村での産業振興に寄与します。

2 自然環境 「ヒト」と「ヤマ」

（1）生物多様性の保全

生物多様性の重要性を認識し、その保全に努めます。

（2）自然災害に対するリスクマネジメント

山林の適切な管理と整備により、災害に強い山林を育てていきます。

- (3) 生物リスクに対するリスクマネジメント
病虫害、シカ害等の被害が拡大しないよう、対策を講じていきます。
- (4) 美しい景観の保持
美しい山林の景観を保持することにより、様々な山林の機能（文化、レクリエーション、防災、生物多様性保全等）を同時に発揮していきます。
- (5) 流域への配慮
山から里、川、平野部、そして海までの様々な受益者と協力し、持続可能な山林資源の利用を模索していきます。

3 山林の管理・マネジメント 「所有」と「利用」

- (1) ソフトインフラ（山林情報）の整備
境界情報や森林蓄積・施業履歴等をはじめとして、山林情報を整理し、見える化していきます。
- (2) ハードインフラ（林道・森林作業道等）の整備
山林の管理が適切にできるよう、林道・森林作業道等のインフラ整備を進めていきます。
- (3) 所有者の責任
山林の所有者が自分の山の情報を把握し、地域の社会資源の所有者として、地域と山林の持続性を保つために、どのような管理が適切か考えていきます。
- (4) 利用者の責任
地域の社会資源の利用者として、地域と山林の持続可能性を保つために、どのような利用及び管理が適切か考えていきます。

(5) 適地適木

持続可能な森林管理に向けて、針葉樹等の一部広葉樹林化等を含め、環境条件に即した適地適木に取り組んでいきます。

4 林業経営 「木材」と「人材」

(1) 人材育成

智頭林業の伝統である長伐期多間伐施業を受け継ぎつつ、山林から持続的に価値を創出し、地域を支えていく担い手を育成していきます。

(2) 低コストかつ持続可能な林業経営の推進

持続可能な林業経営のため、造林、木材伐出等のコスト削減に取り組み、山側（山林所有者や素材生産者等）への還元に努めます。

(3) 智頭林業のブランド力向上

川上（森林の担い手）から川下（木材の利用者）までが連携し、地域の特色を活かした智頭材の生産、及び地域の暮らし・産業の実現に努めます。

(4) 地産他消の推進

智頭林業や智頭材の魅力を都市部をはじめとする県内外に発信し、またその価値を理解してくれる応援者の育成に努めます。地産他消の推進は地域の魅力の再認識や、需要の拡大及び経済基盤の安定に繋がります。

第6 推進に向けて

大切なのは、他地域と差異化された突飛な目標ではなく、やがて地域を担っていく後世の人々へ、丁寧に暮らしの基盤を引き継いでいくことではないでしょうか。

そのためにはそれぞれの集落や地区、あるいは町全体で地域の未来について話し合い、自分たちで地域を創造・実現していくことが必要です。

私たちの祖先も厳しい環境の中で知恵を振り絞り、お互いに支え合いながら、私たちにこの「智頭」を繋いでくれました。

私たちもまた、智頭の山と共に学び続け、振り返り、反省しながら、また次の世代へ豊かな自然環境と共に「智頭の暮らし」を繋いでいく責任があります。

参考文献

智頭町『智頭町誌』 平成12年12月

智頭町森林組合『智頭林業』 昭和46年9月